

熊川宿：中ノ町

熊川宿は、若狭地域と首都京都を結ぶ主要な交易路である若狭街道に沿った物資の輸送が盛んになることで、繁栄した宿場町でした。歴史ある熊川宿は上ノ町、中ノ町、下ノ町の3つのエリアに分かれています。

中ノ町

熊川宿の中心部は、多くの商業及び行政の建物が集まる宿場町の中心でした。通りには、運搬人の事業所、商店、宿泊施設、そして商品の輸送を専門とする菱屋や倉見屋などの繁栄した卸売業者が並んでいました。保存状態の良い建物の建築様式は、貿易を中心に栄えたこの町の経済において主要な役割を果たした裕福な商人が好む様式を示しています。

熊川宿の歴史を通して、行政の仕事は主に中ノ町で行われていました。江戸時代（1603年～1867年）にはこの地域に、奉行所（官庁）がありました。奉行所は運送代理店を規制し、小浜藩の年税を管理しました。20世紀には、主要な道の近くに熊川の役場として西洋風の館が建てられました。現在、この建物は保存資料やパネル展示など、町の歴史や運送の中心地としての役割に関連するさまざまな物品が展示されている若狭鯖街道熊川宿資料館 宿場館として使用されています。

中ノ町には、覚成寺、得法寺、松木神社、白石神社など、お寺や神社があります。松木神社は、かつて小浜藩が税として徴収した米を保管するために使用された12の蔵があった場所にあります。近くの北川からこの蔵まで米を運ぶために、街道から続く御蔵道と呼ばれる道が使われていました。